

国鉄佐藤又ト連帯阻止 全都総決起集会に結集せよ!

10月31日夕刻から、国鉄労働組合、動力車労働組合は、持病助士廃止に反対して17時間のストライキを行ないます。我々東大理学系大学院斗争委員会も、このストライキを支持し、全都の労働者、市民、学生諸氏に、芝公会堂で行なわれる国鉄労働連帯、民主党政治派ト貫徹、佐藤訪米阻止、全都総決起集会への参加を呼びかけます。

現在国鉄のE11(電気機関車)D11(ディーゼル機関車)には二人乗りくんでいます。これを一人乗務にし、人員をべらえうとする計画を昭和42年に国鉄は提示してきました。それが持病助士廃止問題なのです。この問題のうちで、「一人乗務が安全であるか?」について、東大医学部教授で中人間立学を専攻する大島正光が委員長になったE11・D11委員会が、四月に「一人乗務をすすめる上で、安全についての基本的な危惧はない」という結論を出しました。しかしその理由はデタラメなものが多いのです。たとえばこんなことを報告書は書っています。一人乗務にもなると脈搏数が増大した。これは大脳^{興奮}レベルの高進を示すものと解釈できる。大脳の緊張レベルの高進は作業能力の高進を意味し、従つてまた、運転者の作業能力からみた安全性が一人乗務によつて大かまらることを意味するといえる。つまり「二人乗務」だと気がゆるんでいるが「一人乗務」だと責任が重くなつて緊張し頭の働きがよくなつてかえつて安全だというのです。なんと「科学的」な
 (うらを見てください)

東大大学院理学系斗争委員会

ことでしょう。しかも同じ報告書は一人乗務だと作業が多くなって
信号の確認が所定より五〜七秒遅れることがあることを言っている
のです。つまり二人乗務だと信号を見おとす危険がましているわけ
です。これだけ見ても作業能力の衰へ、安全性がたかまる、とは言
えないことは明らかです。何故に二人はここは、こうしているのか、
歌の文句ではないが、二人乗務は理由のないことではないのです。
この報告書にはこのような疑問点がたくさんあります。特に、鉄道
労働科学研究所の二人の研究員は、このような疑問点を指摘しまし
た。それに対する返覆は、この二人に対する、公的活動を禁止する
という「業務命令」だったのです。権力をもつて口をふさごうとい
うわけですね。そして国鉄当局の意向に沿うような報告書を書いたの
が東大医学部、教授、大島正光だったのです。東大の「一人向工学」
とは、まさにこのようなものだったのです。東大斗争の中心的人物
である豊川行平と同じく政府権力と結びついた大学教授のイメージ
を我々は再びこの大島正光に見るのです。

いかにせよ、全都の学生、労働者、市民の諸君。問題の本質を我
々は見失ってはならない。このようななりふりかまわぬ安全性無
視の合理化攻撃の目的は一体何なのであろうか。それは日本帝国主
義が、激化する列強間の市場争奪戦に勝抜き、東南アジア進出を容
易にする目的で労働者、市民からのサク取を強化であり、そのた
めの労働者の管理を都の強化と困難の源泉である。これらの全面的
再編を期して国内体制の弱さを克服することなのだ。そしてそのた
めの国際的、軍事的体制を確立するものとして七十年安保条約があ
るのだ。謀略は、この安保条約を「自動延長」という形で、実質的
な内容も十一月の佐藤訪米の際の日米合意書で取決めようとしてい
る。

七十年安保に反対することは十一月佐藤訪米を阻止することだ。
合理化と安保は、帝国主義者の労働者階級に敵対する政策とし
てあり、それゆえに、我々は、反合理化斗争に連帯するとも
に、十一月佐藤訪米阻止の斗争をつよめなければならぬ。